

(PDF 版・1の8)『教会教義学 神論Ⅰ／1 神の認識』「五章 神の認識 二十五節 神認識の実現」「一 神の前での人間」

(文責・豊田忠義)

「五章 神の認識 二十五節 神認識の実現」「一 神の前での人間」(1-54 頁)

「一 神の前での人間」

「自己自身である神」としての「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質とする「三位相互内在性」における「一神」・「一人の同一なる神」・「三位一体の神」の、「われわれのための神」としてのその「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」における第二の存在の仕方(性質・働き・業・行為・行動、子なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事)、「啓示ないし和解の實在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とするその最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の實在」(「啓示の<しるし>」)として「啓示との<間接的同一性>〔区別を包括した同一性〕」において現存している第二の形態の神の言葉である「聖書的な神認識は〔信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰、人間的主観に実現された神の恵みの出来事は〕」、「常に、〔イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、その「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の<総体的構造>における神のその都度の自由な恵みの神的決断による「啓示と信仰の出来事」に基づいた〕人間と神との出会い」——すなわち、「その中で、〔キリストにあっての神としての〕神が、いずれにしてもその支配を人間に及ぼし、……それからまた神が、支配者として承認され、そのようにして神として認識され給う出会い」、「その主導権は、常に神から出ており〔イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、その「啓示自身が啓示に固有な自己証明能力」の<総体的構造>——すなわち、客観的な「存在的なく必然性>」(その「死と復活の出来事」におけるイエス・キリストの「啓示の出来事」)と主観的な「認識的なく必然性>」(「聖霊の注ぎ」による「信仰の出来事」)を前提条件とした客観的な「存在的なくラチオ性>」(それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造、秩序性)と主観的な「認識的なくラチオ性>」(徹頭徹尾聖霊と同一ではないが聖霊によって更新された人間の理性性)を持っており、その<総体的構造>における神のその都度の自由な恵みの神的決断による「啓示と信仰の出来事」に基づいており]、それは、人間にとって常に予見され得ない何ものか、驚くべき新しい何ものかを持っており」、「その中で、人間は、神といわば出発点に戻って事を始めなければならず〔具体的には、われわれの思惟と語りにおける「先ず第一義的に優位に立つ原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準としてのイエス・キリストと共に、教会の宣

教における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準である聖書」の中で証しされているところの、「自己自身である神」としての「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする「三位一体の神」の、「われわれのための神」としてのその「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」における「第二の存在の仕方」、「ナザレのイエスという人間の歴史的形態」としての「イエス・キリストの＜名＞」、「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉、「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神にしてまことの人間イエス・キリストに戻って事を始めなければならず〕、〔終末論的限界の下でのその途上で、絶えず繰り返し、聖書に聞き教えられることを通して教えるという仕方
で、〕 全く新しく出直して来……なければならぬ出会い」、「それは、おそらく以前の出会いの継続であり得るが、しかしその中で同時に、すべての以前のことが新たに秤にかけられ、神認識が新しい決断の対象となるところの出会いに基づいている」。したがって、バルトは、次のように述べている——起源的な第一の形態の神の言葉である「イエス・キリストが、われわれ人間に対して、〔そのイエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉である〕聖書および〔その聖書を、自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準とした第三の形態の神の言葉である〕教会の宣教を通して同時的となる時と所、『神われらと共に』が神ご自身によって〔「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の＜総体的構造＞に基づいて〕われわれに語られるところにおいては、われわれは神の支配のもとに入ることを承認し確認する」、「世、歴史、社会を、その中でキリストが生まれ、死に、甦られたところの世、歴史、社会として承認し確認する」、「自然の光の中でではなく、恵みの光の中で、それ自身で閉じられ、かくまわれた世俗性は存在せず、ただ神の言葉、福音、神の要求〔命令〕、判定〔裁き〕、祝福によって問いに付され、ただ暫時的にだけ、ただ限界の中でだけ、それ自身の法則性とそれ自身の神々に委ねられた世俗性があるだけであることを承認し確認する」、それ故に第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の宣教およびその一つの補助的機能（教會的な補助的奉仕）としての教義学における思惟と語りが、「キリスト教的語りの正しい内容の認識として祝福され、きよめられたものであるか、それとも怠惰な思弁でしかないかということは、神ご自身の決定事項であって、われわれ人間の決定事項ではない」、それ故にその思惟と語りは、「『主よ、私は信じます。私の不信仰を助けて下さい』というこの人間的態度〔「祈りの態度」〕に対し神が応じて下さる〔「祈りの聞き届け」〕ということに基づいて成立している」、と。

「言うまでもないことであるが、例えばアブラハム、モーセ、ダビデのような者」も、「一度神によって選ばれ・召され・照らし出され・委任を受けると」、「一遍に、神との間柄がどうなっているかすべてを理解してしまうというのではなく」、

「むしろ神からして一度ですべてにわたって力を奮う仕方、彼らに関して決められたことが、〔類としての神認識の時間性である「長い更新の歴史の中で」〕その都度〔神のその都度の自由な恵みの神的決断による「啓示と信仰の出来事」に基づいて〕……彼らの身に実現され・成就されなければならない——「この更新が、生起し、効果を発揮することによって、彼らは、聖書が神認識と呼ぶところのことを持つのである」。したがって、第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の宣教に属するバルトは、次のように述べている——「それ以前に語られた神ご自身の言葉……と自分に関わらせている……時、正しい内容を持っているということであり、われわれ以前の人々によってなされた教義学的作業の成果は、根本的には……真理が来るということのしるしである」、「聖書釈義と絶えず接触を保ちつつ、また教会の古今の注解者・説教家・教師の発言を批判的に比較しつつ、その時々の現在における教会の表現・概念・命題・思惟行程の包括的研究において『教義そのもの』を尋ね求める〔このような仕方、「聖書への絶対的信頼」に基づいて、聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、区別を包括した単一性において、「神への愛」としての「教えの純粋さを問う」教会教義学の課題と、その教会教義学に包括された「神への愛」を根拠とした「神の讃美」としての「隣人愛」としての「正しい行為を問う」特別的な神学的倫理学の課題を尋ね求める——このようにバルトにおいては、ちょうど福音と律法が二元論的に分離・対立しておらず、律法（神の命令・要求・要請）は純粋な教えとしてのキリストの福音を内容とする福音の形式であるように、教義学と倫理学、言葉（理論）と行為（実践）は二元論的に分離・対立しておらず、言葉（理論）が行為（実践）の方へ必然的につれ出して行くように出来上がっている、「聖書への絶対的信頼」に基づいて、聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として「かつて語った〔キリストの福音の〕説教の一貫した繰り返し、（ある状況下において、その状況に抗するそれとして）おのずから〔自然に、必然的に〕実践に、決断に、行動になって行った」（『カール・バルトの生涯』）」、と。

「エジプトからの脱出が、〔自己自身である神としての「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする「三位相互内在性」における三位一体の神の、われわれのための神としてのその「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」における起源的な第一の存在の仕方である父なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事としての〕神の業およびしるしとして、認識を基礎づける〔神ご自身の側からする〕神ご自身の偉大な対象化として、すべてのものの目の前に立っている」。しかし、その「出エジプト」は、「そのようなものとして見て取られ・理解されるために、常に、新しい形態と声を得て来なければならない」、すなわち「出エジプトの神が、そのみ業としるしの中で認識され・再認識されるために、預言者たちに向かつて、また預

言者たちを通して、語り・繰り返し語り給わなければならない」。何故ならば、「イスラエルの歴史のすべての時代にわたって、……ちょうど人が、バアルを持つことができるが、ヤハウェを持つことができないような仕方で、……ヤハウェを持っていると考えた」「ヤハウェ信仰」が、それ故に「既にヤハウェ信仰としてはひそかな墮落であり、また実際異なる神々への墮落の形をとって速やかにその本性をあらわすヤハウェ信仰が存在した……」からである。このような訳で、「**新しい恵みなしには、そのみ業の中で神が働き給うことなしには、イスラエルは、いつ何時、神から身を背け、それからまた内的にも自分の身に汚辱を招きつつ滅びてしまうであろう。**すべてのことは、神が、〔神のその都度に自由な恵みの神的決断による「啓示と信仰の出来事」に基づいて〕ご自身を証しすることをやめ給わないということによってもってかかっている」。聖書的な神認識を認識し自覚している時、「誤謬は必然である」ということにはならないとしても、例えばそれが教会論的なキリスト教的人間であれ、それがただの人間である以上、「誤謬は可能である」から、その「神認識」は、「その対象からして、その都度〔神のその都度の自由な恵みの神的決断による「啓示と信仰の出来事」に基づいて〕繰り返し新たにされ・基礎づけ」られなければならない。人間論的な自然的人間であれ、教会論的なキリスト教的人間であれ、誰であれ、「神に敵対し神に服従しないわれわれ人間は、肉であって、それゆえ神ではなく、そのままでは神に接するための器官や能力を持ってはいない」ところの、また生来的な自然的な「『自分の理性や力〔感性力、悟性力、意志力、想像力、自然を内面の原理とする禪的修行等々〕によっては』——全く信じることができない」ところの、「それらの人間の下で、真理〔啓示の真理〕は、もしもそれが、恵みとして、繰り返し、〔神のその都度の自由な恵みの神的決断による「啓示と信仰の出来事」に基づいて〕彼らに向かって語るものでなければ、どこに残っているであろうか」。「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする三位一体の神の、その「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」における第二の存在の仕方、すなわち子なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事は、「生来人間は、神の恵みに敵対し、神の恵みによって生きようとしなが故に、このことこそ、第一に恵みが解放しなくてはならない人間の危急であった」ことを、われわれに認識させる、それ故にわれわれは「神の選びをイエス・キリストの復活において認識し、神の放棄をイエス・キリストの十字架〔復活に包括された死〕において認識する」。「われわれ人間の更新を可能とするのは、ただ今日に至るまで罪人の手に渡され・十字架につけられ・死んで甦られ給うたイエス・キリストにある＜復活の力＞だけである」。したがって、近代の宗教的形態が絶対主義としての科学＜主義＞にあるとしても、聖霊自身の業である「キリスト教に固有な」類と歴史性の関係と構造（秩序性）に連帯し連続し、その秩序性における第二の形態の神の言葉である聖書を、自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準とし、絶えず繰り返し、聖書に聞き教えられるこ

とを通して教える仕方で「神への愛」と「神への愛」を根拠とした「神の讃美」としての「隣人愛」という連関と循環において、イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの活ける「ヒトツノ、聖ナル、公同ノ教会」共同性を目指すべきキリスト者が、もしもブルトマンやそれに類する人たちのように「同時代の人たち〔「教養人」、大学知識人、それに類する人たち〕の思考の前提に対して」、「そこから形成された理解の規準〔その「教養人」、大学知識人、それに類する人たち〕に対して」「責任的応答」をするために、それ故に復活と復活に包括された十字架の死というその全体性においてではなく、キリストにあっての神としての神だけでなくわれわれ人間も、われわれ人間の自主性・自己主張・自己義認の欲求もということで、「世界の救いを何かある国家的、政治的、経済的または道徳的、倫理的な諸原理や理念や体制の内に求める」ために、一方的にその十字架の死にだけ一面的に偏向して、「われわれ人間の更新を可能とするのは、ただ今日に至るまで罪人の手に渡され・十字架につけられ・死んで甦られ給うたイエス・キリストにある＜復活の力＞だけである」ということに感謝をもって信頼し固着しないならば、「更新の可能性」を持つことはできないと言うことができる。

そのような「旧約聖書の線が、共観福音書記者によっても、ヨハネによっても、またイエス・キリストがその場に現る現臨の中でも、いずれにしてもその死に至るまで、いや正確にとるならばその昇天に至るまで変えられないでそのまま続いているということは明らかである」。何故ならば、『民』とパリサイ人と学者たちを全く度外視するとしても、「イエスが選ばれ・召された弟子たちも、決して一度ですべてにわたって力を奮う仕方で信じる者・知る者・支えられている者・立っている者として、決定的に保証された神認識を所有する者として描かれておらず」、「むしろ旧約聖書におけるイスラエルの民およびその神の人たちのように、常に新しい状況の中で、確信のない者・疑う者・誤謬と失敗を重ねる者として、常に新しい教え・叱責・励ましによって強められることを必要としており、また事実そのようなものにあずかっている者として描かれている」からである。したがって、「彼らに関して積極的に見てとられ語られるべきこと」は、「その中でまた、〔新約聖書における〕彼らに対しても〔自己自身である神としての「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする三位一体の神の、われわれのための神としてのその「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」における第二の存在の仕方、「啓示ないし和解の実在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉、「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神にしてまことの人間〕イエスから繰り返し新しく更新がなされた〔彼らの〕忠実さである」。「告白し、それでいて直ちに否定するペテロとすぐ並んで存在する裏切り者ユダの姿は、……その縁のところで、彼らが、彼ら自身があることあるいはなったことを通してではなく、ただイエスのその忠実さを通

して支えられている深淵の深さを示している」。

「その絵〔その線〕」は、「顕著な仕方で、いずれにしても使徒たちと使徒職の担い手たちに関する限り、使徒行伝の中で、換言すれば聖霊降臨日以降変えられるのである」。「そこでは、それらの人間の動揺、疑い、誤謬について——ガラテヤ人への手紙二章は、通則を確認する例外であるが——、もはや何も語られていない」。「彼らが、アブラハム、モーセ、ダビデと同じように、旧約の民全体と同じように、墮落することができ、更新を必要としているということ」は、「聖霊降臨日以降からは、いずれにしてももはや強調されていない。いや、もはや意図的に明らかにされていない」。すなわち、「聖霊降臨日以降から」は、第二の形態の神の言葉である使徒たちと使徒職の担い手たち——「彼ら自身は、今やユダヤ人、異邦人、この世の権力者たちに相対して、……とりわけまたユダヤ人と異邦人から選ばれた〔第三の形態の神の言葉である〕教会に相対しても、……福音書によれば、以前にはただイエスだけがそうであった安定した極となったように見えるのである」。第二の形態の神の言葉である使徒たちと使徒職の担い手たち——「彼らに相対して」、「今やただ……イエス・キリストのみ名が宣べ伝えられなければならない、……イエス・キリストのみ名が既に宣べ伝えられており、〔三位相互内在性〕における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする三位一体の神の、その「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」における第二の存在の仕方、すなわち「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身によって直接的に唯一回の特別に召され任命されたその人間性と共に神性を賦与され装備された使徒たちの「イエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教」である聖書における〕新しい恵み・新しい教え・慰め・叱責をあのように必要としている人間たち〔キリスト復活から復活されたキリストの再臨までの聖霊の時代、中間時を生きる全世界としての第三の形態の神の言葉である教会自身と世の人々〕が現れている」。「その職務の中で彼らは、使徒行伝以後登場して来るのであるが」、換言すれば「啓示との〈間接的同一性〉〔区別を包括した同一性〕」としての、イエス・キリスト自身によって直接的に唯一回の特別に召され任命されたその人間性と共に神性を賦与され装備された第二の形態の神の言葉である「イエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教」（「啓示の〈しるし〉」）としての「その〈職務〉の中にある使徒たち」は、「彼らが、人間として、以前と同様以後においても、新しい恵みを必要としているということは確かに否定されていない」が、「それとして、……彼らの神認識を確認し強固なものにして行くために、事実、新しい恵みを必要としないのである〔何故ならば、彼らの信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰、人間的主観に実現された神の恵みの出来事は、「罪人の手に渡され・十字架につけられ・死んで甦られ給うたイエス・キリストにある〈復活の力〉」に包摂されているからである〕」。「今や確かに、キリストの甦りと

昇天のこちら側では、ただイエス・キリストの中で起こった神の業の生ける構成要素としての「第二の形態の神の言葉である」彼らの役割」が、「重要である」。「福音書は、全く率直に」、「神の業が彼らの＜身に対して＞も起こったということ……どのように起こったかということ、また確かに後からも起こったということについて……語っているのであるが、そのことが重要なのではなく」、「むしろ神の業が、今や〔イエス・キリスト自身によって直接的に唯一回的特別に召され任命されたその人間性と共に神性を賦与され装備された第二の形態の神の言葉としての、「恵みの道具」としての使徒たち〕彼らを＜通して＞起こっているということが重要なのである」。「神の業が、彼らを通して起こる限り、彼ら自身が恵みの道具である限り、彼らは明らかにあの更新を必要としてい＜ない＞のであり」、それ故に「あの更新の問題は、ただ〔「啓示ないし和解の実在」そのものとしての第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とするその最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の実在」としての第二の形態の神の言葉としての、「恵みの道具」としての彼らを必要としている、そして〕彼らに相對している……ただほかの者たちにとってだけ立てられているのであって〔全世界としての第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会と世の人々にとってだけ立てられているのであって〕、彼ら自身にとっては立てられていないのである〔「啓示との＜間接的同一性＞」として、「恵みの道具」として存在している、その最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の実在」（「啓示の＜しるし＞」）としての第二の形態の神の言葉である彼ら自身にとっては立てられていないのである〕」。「使徒としての彼らの現実存在の中で〔起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉である「恵みの道具」としての彼らの現実存在の中で〕、まさにイエス・キリストの人間的な出現の副次的な対象性が〔その最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の実在」（「啓示の＜しるし＞」）としての第二の形態の神の言葉である聖書、使徒たちの「イエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教」が〕、またこの副次的な対象性の中に隠されて、神の子の主要な対象性が繰り返される〔その内在的本質である神性の受肉ではなく、その第二の存在の仕方における「言葉の受肉」、「ナザレのイエスという」人間の歴史的形態としての「イエス・キリストの＜名＞」、「啓示ないし和解の実在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉、「最初の、起源的な、支配的なくしるし＞」が繰り返される〕」。言い換えれば、そのことは、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、その「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の＜総体的構造＞に基づいた第三の形態の神の言葉である教会の宣教が、三位一体の唯一の啓示の類比としての神の言葉の実在の出来事である、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」（換言すれば、聖霊自身の業である「キリスト教に固有な」類と歴史性）の関係と構造（秩序性）に連帯し連続し、

その秩序性における第二の形態の神の言葉である聖書を、自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、終末論的限界の下でのその途上性で、絶えず繰り返し、聖書に対する他律的服従とそのことへの決断と態度という自律的服従との全体性において、聖書に聞き教えられることを通して教えるという仕方
で、純粋な教えとしてのキリストにあっての神としての神、キリストの福音を尋ね求める「神への愛」と、そのような「神への愛」を根拠とした「神の讃美」としての「隣人愛」（純粋な教えとしてのキリストの福音を内容とする福音の形式としての律法、神の命令・要求・要請）という連関と循環において、イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの活ける「ヒトツノ、聖ナル、公同ノ教会」共同性を目指すという仕方
で繰り返される。そのことは、「信仰へと招き、信仰へと呼び覚えし、信仰を、また信仰の中で神認識〔信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰、人間的主観に実現された神の恵みの出来事〕を、確認し・更新しつつ、それらの人間たち自身の力を通してではなく、〔神の側の真実としてのみある〕彼らに分かち与えられた聖霊の力を通して・恵みの自由の中で〔すなわち、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、その「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の＜総体的構造＞における神のその都度の自由な恵みの神的決断による客観的なイエス・キリストにおける「啓示の出来事」とその「啓示の出来事」の中での主観的側面としての「復活され高举されたイエス・キリストから降下し注がれる霊である」「聖霊の注ぎ」による「信仰の出来事」に基づいて〕、繰り返される」。

さて、三位一体の唯一の啓示の類比としての神の言葉の實在の出来事である、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」（換言すれば、聖霊自身の業である「キリスト教に固有な」類と歴史性）の關係と構造（秩序性）における「啓示ないし和解の實在」そのものとしての**起源的な第一の形態の神の言葉は**、「直接的な、絶対的な、内容的な權威と共に直接的な、絶対的な、内容的な自由を持つ」ところの、「教会の宣教における先ず第一義的に優位に立つ原理」・「規準」・「法廷」・「審判者」・「支配者」・「標準」・「基準」である。また、そのイエス・キリスト自身を起源とする「啓示との＜間接的同一性＞〔区別を包括した同一性〕」における**第二の形態の神の言葉は**、イエス・キリスト自身によって直接的に唯一回の特別に召され任命されたその人間性と共に神性を賦与され裝備された「預言者および使徒たちの最初の直接的な第一のイエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教」（聖書）、その最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の實在」（「啓示のしるし」）のことであり、イエス・キリストと共に、「直接的な、絶対的な、内容的なイエス・キリストのまことの神性」——すなわち「權威」と「直接的な、絶対的な、内容的なイエス・キリストのまことの人間性」——すなわち「自由」によつ

て賦与され装備された「権威と自由を持つところの聖書」のことであり、「教会に宣教を義務づけている」第二の形態の神の言葉として、第三の形態の神の言葉であるイエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの教会（そのすべての成員）の宣教およびその一つの補助的機能（教會的な補助的奉仕）としての教会教義学（福音主義的な教義学）の思惟と語りにおける「原理」・「規準」・「法廷」・「審判者」・「支配者」・「標準」・「基準」である。したがって、**第三の形態の神の言葉**であるイエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの教会における「権威と自由」は、あくまでも「直接的な、絶対的な、内容的なイエス・キリストのまことの神性」——すなわち「権威」と「直接的な、絶対的な、内容的なイエス・キリストのまことの人間性」——すなわち「自由」とによって賦与され装備された「権威と自由を持っている聖書の権威と自由に基づけられている」ところの、あくまでも「間接的・相対的・形式的な権威と自由として、徹頭徹尾、限界づけられている」のである。何故ならば、第二の形態の神の言葉である「預言者および使徒たちと〔起源的な第一の形態の神の言葉である〕イエス・キリストとの出会いの直接性における直接的、絶対的、内容的な権威と自由」——すなわち、「イエスの弟子たちがキリストの後に従う随従」は、「直接的な唯一回の特別なそれであるから、繰り返され得ないものである」からである。第二の形態の神の言葉である預言者および使徒たちと起源的な第一の形態の神の言葉である主なるイエス・キリストとの関係は、「啓示そのものが一回的であるのと同じように、一回的な関係である」。したがって、同様に、そうした第二の形態の神の言葉である「預言者および使徒たちの現実存在」と第三の形態の神の言葉である「教会・その成員の現実存在とは、本質的に同一ではない」、それだけでなく、「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）からして、第三の形態の神の言葉を、起源的な第一の形態の神の言葉およびそれを起源とする第二の形態の神の言葉に「先行させることはできない」。起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉である聖書を、自らの思惟と語りにおける「原理」・「規準」・「法廷」・「審判者」・「支配者」・「標準」・「基準」とすることを通した（それを媒介・反復することを通した）その「間接性こそが、主ご自身を通して設けられ、主の甦えりを通して力を奮うのである」。したがって、バルトは、第二の形態の神の言葉である聖書を媒介・反復するところの、起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリストと第三の形態の神の言葉である教会（そのすべての成員）との媒介的・反復的な関係性（「間接的な関係性」）のことを、「まことの直接性」、「まことの関係性」と述べた。

「イスラエルの民のかしら生まれ給うた後〔自己自身である神としての「三位相互内在」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質とする三位一体の神の、われわれのための神としてのその「外に向かつて」の外在的なその「失われな

い差異性」における起源的な第一の存在の仕方、イエス・キリストの父なる神の存在が生まれ給うた後]、換言すれば預言者が誰について証ししていたかが明らかとなった後]、「預言者の中に安定した極があり」、「神ご自身の副次的および主要な対象性が存在し・活動していたという事実の方」が〔すなわち、その最初の直接的な第一の預言者の証しおよび父なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事——啓示者・言葉の語り手・創造主が存在し・活動していたという事実の方〕が]、「神が、ご自身を、預言者たちに対して、その都度対象となし給い、また彼らをその都度神ご自身を認識する者となし給うたことによって、ただ神ご自身を通してだけ彼らが現にあるところのものとなったという事実よりも重要なものとなった」。「ちょうど確かに人間イエスも、その弟子たちと連帯責任をもって結ばれつつ、またその民と連帯責任をもって結ばれつつ祈り給うたように」、「使徒たちも＜祈る＞ということに」、「人は…注意せよ」。「使徒たちがそのように祈ったということは、……その職務の担い手たちの中でも、また照らし出す恵みの道具〔すなわち、第二の形態の神の言葉である「聖書は、先ず第一義的に優位に立つ原理〔・規準・法廷・審判者・支配者・標準・基準〕としての〔起源的な第一の形態の神の言葉である〕イエス・キリストと共に、〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕教会の宣教における原理〔・規準・法廷・審判者・支配者・標準〕として「照らし出す恵みの道具」〕の中でも、……彼らの神認識の更新を必要としていた人間と関わらなければならないことをはっきりと思ひ出させるものである」。

そのような訳で、「旧約聖書の神を認識する人間〔「恵みの状態の中にある人間」〕に相対して、新約聖書の中では神を認識する人間の状況が原則的に変化したなどと言うことについては、何ら語られ得ない」。「そのことを、人は、使徒行伝の中で、とりわけ書簡の中で、……その者たちに対して、〔第二の形態の神の言葉である〕使徒たちが、誕生しつつある〔第三の形態の神の言葉である〕教会の建設者および指導者として」、「使徒たちの証言をもって身を向けたその人間たちに視線を向ける時、直ちに見てとるのである」。すなわち、そこにおいても、「明らかにイスラエルの状況が再び姿を現してくる」。したがって、そこにおいては、「神の業がその者たちの身に起こる人間たちの間で、明らかに絶え間なく、〔イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の＜総体的構造＞に基づいて〕教えられ、警告され、慰められ、もう一度始めからやり直さなければならない」。すなわち、そこにおいては、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の＜総体的構造＞に基づいて、「信仰の上に、換言すれば〔「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉である〕イエス・キリストなる土台と隅のかしら石の上に建てられるのであり、信仰の〔人間的〕主体の上ではなく、対象〔最初の、起源的な、支配的なしる

し」としての「言葉の受肉」、「ナザレのイエスという人間の歴史的形態」としての「ただイエス・キリストの〈名〉だけ」の上に、〔その最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の實在」（「啓示の〈しるし〉」）としての第二の形態の神の言葉である〕使徒たちによってなされ、〔その聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準・基準とした教会の〈客観的な〉信仰告白および教義Credoとしての第三の形態の神の言葉である〕教会によって受け取られた使信の内容の上に建てられるのである。したがって、『以前』は、まさに宣べ伝えられ・言い伝えられ・信じられたイエス・キリストであり、生ける主としてのこの方であり、その自由な恵み、あくまで自由であり続ける恵みの中でのこの方であり、「ピリピ三・一二以下によれば、パウロ自身も捕らえたとは考えず、むしろその方によって捕らえられていることに基づいて、捕らえようと追い求めている方である」。「ただこの状況の中でだけ、また新約聖書の教会の中でも、神認識〔信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰、人間的主観に実現された神の恵みの出来事〕にまで来るのである。自己自身である神としての「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする三位一体の神の、われわれのための神としてのその「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」における第三の存在の仕方、すなわち「言葉を与える主は、同時に信仰を与える主である」から、神的愛に基づく父と子の交わりとしての「聖霊の中で〔客観的なイエス・キリストにおける「啓示の出来事」の中での主観的側面としての「聖霊の注ぎ」による「信仰の出来事」の中で、聖霊なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事の中で〕神認識を現実にし・可能にするところの和解主イエス・キリストは〔その第二の存在の仕方、客観的なその「死と復活の出来事」におけるイエス・キリストの「啓示の出来事」、子なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事は〕、言うまでもなく、〔その内在的本質からして、また〕創造主……であり、……また救済主であり」、それ故に「すべての神認識の未来的な真理……であり給う」。常に先行する神の用意に包摂された後続する人間の用意ができていところの、「人間に対する神の愛と神に対する人間の愛の同一」（『ローマ書』）であり、「永遠の（神との人間の）和解」（徹頭徹尾神の側の真実としてのみある、神の側からする神の人間との架橋）であり、「神との間の平和」（ローマ五・一）であり、それ故に神の認識可能性である「自己自身である神」としての聖性・秘義性・隠蔽性において存在している「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする「一神」・「一人の同一なる神」・「三位一体の神」の、「われわれのための神」としてのその「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」における第二の存在の仕方、「啓示ないし和解の實在」そのものとしての起源的な第一の形態の言葉で、「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神にしてまことの人間イエス・キリストにおいて、「神の用意の中に含まれて、人間にとって、神に向かつての、したがって神認識〔信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓

示信仰、人間的主観に実現された神の恵みの出来事〕に向かつての人間の用意が存在する」、すなわち常に「先行する神の用意」に包摂された「後続する人間の用意」という「人間の局面は、全くただキリスト論的的局面だけである」。